

〈修士論文要旨〉

## 対人心理距離におけるパーソナリティ特性としての 「原子価」の影響に関する実証的研究

別 所 崇\*

### I. 問題と目的

人間は他者と接するとき、相手の年齢・地位や、相手との親密さに応じて、言葉遣いや態度等で、知らず知らずのうちに、適当な距離を保とうとしている。Hall (1966) は、このような人間同士の間の距離感について、プロクセミクス (Proxemics) という学問を提唱した。そこでの主要なテーマは、人と人とが社会的接触を行なうときに、その間にとられる物理的距離の大きさであった。この人間の持つ距離感がどのように決定されるかは、個人空間 (Personal Space) の問題とも結びつく。Sommer (1969) は、それを「個人の空間は、侵入者が入れないように、その人の身体をとり囲む見えない境界」であるとした。また、Little (1965) は「パーソナル・スペースは、個人の他者との交流の大部分が行われるところ」として定義した。つまり、これらの距離によって表されるのは、個人の持つ物理的な空間である。

一方、対人距離は一方向に向いているのではなく、一定の広がりを持っており、その取り方は、相手との親密度に応じて、伸縮自在に動くものであるとされる。近年、対人距離を研究する領域で、この親密度は心理的距離 (Psychological distance) と呼ばれており、いくつかの研究が行われている。例えば山根 (1995) は、心理的距離という用語の心理学での使われ方には、物理的距離に対するものとしての心理的距離感と、「対象との親密感としての馴染み・疎遠感覚としての使われ方」とがあるとしている。また、教師と生徒との心理的距離について研究を重ねてきた山口 (2004) は、心理的距離を「ある人とある人との間に存在する二者間の親密度・親和性・親近感の度合いや程度を表す概念」と定義している。山根 (2005) は心理的距離の一般モデルが構成されたならば、そこに個人差 (性格傾向など) があるかどうかを問題にする必要があると指摘し、クレッチマーの気質類型論と心理的距離との関連を探った。ところで、気質という言葉は、心理学辞典によれば、「個人の示す情動反応の特徴」と説明されている。したがって、山根が述べている、気質と心理的距離との関係は、個人の特性という観点からみた距離感としてとらえることができるであろう。しかしながら、二者間の距離には、当事者と相手が必要である。よって個人の特性、つまり個人がどうであるかという見方だけでは、もう一方の相手を考慮しているとは言えない。

そこで、本研究では個人と他者との関係のあり方、つまり他者とつながるための特性からみた心理的距離を、Bion (1961) とHafsi (1997, 2006) の原子価の理論を使って明らかにしようとする。

平成18年度 \*社会学研究科社会学専攻 (臨床心理学コース)

試みた。Hafsi (2006) は、原子価が個人の物理的・社会的環境に関する考え方、人との接触の仕方、グループにおけるいろいろな活動、人間関係のあり方などに反映されるとしている。本研究の目的は、対人関係における心理的距離の取り方にも、個人の持つ原子価が影響するであろう、という基本的な仮説を立て、原子価と距離との関係に関するこの仮説を吟味することである。

## Ⅱ. 方法

前述したように、これまでの心理的距離の研究では、気質など個人が持つ特性や親密度からみた距離感が主な研究対象であり、個人と他者とのつながりから見た対人心理距離についての研究は少ないと言える。そのため、本研究では、対人交渉場面において一般的にある、二者間で打ち合わせを行なうという状況を設定し、ある部屋に配置された5つの座席のどこに自分と相手を座らせるか、という座席選択行動についての尺度を作成し、各個人の原子価がどのように反映されるかを検証しようと試みた。

**対象：**本調査に参加したのは、大学で心理学の授業を受講している大学生124名（男子=73名、女子=51名）である。

**尺度：**以下の2つを使用した。まず、個人の原子価を測るため、Valency Assessment Test (VAT) (Hafsi, 2007) という文章完成式のテストを使用した。これは、Stock & Thelen (1958) によって開発されたRGST (Reaction to Group Situation Test) に基づいてHafsi (1997) が改訂したRGST-Nu (Reaction to Group Situation Test~奈良大学版) を、さらにHafsi (2007) が改訂したものである。次に本研究の目的である、対人心理距離の測定のために、対人心理距離尺度 (別所, 2007) を使用した。この対人心理距離尺度では、「あなたはゼミの飲み会の打ち合わせで、これからAさん、Bさん、Cさん、Dさんの4人の人と会うことになりました。」という状況のもと、以下の教示に従って、A~Dの順番で回答を求めた。「あなたはまず、△さんと会うことになりました。残りの3人はあとで来ます。会場の座席配置は下図のようになっています。あなたはどの席に座りますか? ○印に×印をつけて下さい。そして△さんはどこに座ってもらいたいですか? その○印にアルファベットを記入して下さい。」このように、あらかじめ印刷されたある部屋における5つの座席に、まず自分の座る位置を決めさせ、そののちにAの人物の座る位置について記入させ、以後B、C、Dについても同様に、自分の座る位置と、相手の座る位置を記入させた。A~Dの4人の人物については、属性を以下のように設定した。Aさん：「気が合いそうにない人」、Bさん：「気が合いそうな人」、Cさん：「異性の人」、Dさん：「初めて会った人」である。同時に、なぜその人物をそこに座らせたのかを、それぞれについて、自由に記述させた。

## Ⅲ. 結果

まず、被験者の大学生124名を原子価ごとに分類するために、VATを採点した。採点した結果は、依存原子価61名、闘争原子価28名、逃避原子価13名、つかい原子価22名であった。

次に、対人心理距離尺度において、自分自身の座席をどこに配置したのかを座席番号で示し、原子価との間でクロス集計を行なった。その結果、相手が「気が合わない人 (A)」の場合にのみ原子価と自分自身の座席配置との間に、有意な関係が見られた。しかし、相手が「気が合わない人 (A)」以外の場合は、原子価による自分の座席選択に、有意な関係は見られなかった。

さらに、原子価と4人の相手との距離の取り方について検討するため、一元配置分散分析を行なった。自分と相手との距離については、自分自身を配置した座席を基準にして、4人の人物との距離を、1：近い、2：やや近い、3：やや遠い、4：遠い、の4段階に分けて数値化した。その結果、4人の人物全員に対しての距離の取り方について、原子価ごとに有意な差がみられた。

最後に、4人の人物について、どうしてそこに配置したのかの理由について自由記述の回答を臨床心理学専攻の教授1名と、院生3名の合計4名で検討し、記述された内容を、依存的、競争的、逃避的、つがいの的に分類した。その後、原子価とそれぞれの理由とでクロス集計を行なった。その結果、4人の人物全員に対するそれぞれの理由について、有意な関係が見られた。

#### IV. 考察

上述した結果から、対人心理距離尺度のそれぞれの人物（気が合いそうにない人、気が合いそうな人、異性の人、初めて会った人）との関係において、原子価が距離の取り方に影響を及ぼしており、対人関係における心理的距離の取り方にも、個人の持つ原子価が影響するであろう、という基本的な仮説は、実証されたとと言えるだろう。

本研究によって示唆された結果は、今後対人関係の生じる様々な分野に応用することができるだろう。特に対人関係の希薄さが指摘されている青年期では、長沼・落合（1999）が「相手とどのように心理的距離をとるかということが、現代青年の友人関係においては重要なポイントとなっている」と指摘しているように、相手との心理的距離の取り方に関する問題を多く抱えている。また、近年、教師と児童・生徒との関係、あるいは同性・異性の友人関係の問題が、大きな比重を占めている教育分野では、十分に応用することが可能であろう。